

琉球大学学術リポジトリ

広汎性発達障害者の身体の外枠作りと内枠作りによる心理療法：他者との関係性の成立と発達の支援

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター 公開日: 2008-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浦崎, 武, Urasaki, Takeshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5107

広汎性発達障害者の身体の外枠作りと内枠作りによる心理療法 — 他者との関係性の成立と発達の支援 —

浦崎 武

The Psychotherapy for the Clients with Pervasive Developmental Disorder from the Viewpoint of Their Outer and Inner Framing of the Body : Their Establishing a Relationship with Others and Their Developmental Support

Takeshi URASAKI*

The purpose of this paper is to give an account of the author's experience of psychotherapy for the clients with pervasive developmental disorder (hereafter cited as autism), so as to suggest a new direction in therapeutic intervention with autism. I have paid attention to the Frequency in which the clients create frames in our play therapy. My case studies lead me to the conclusion that creating frames is connected with the acquisition of their body image. I have arrived at the conclusion of the importance of their establishing a relationship with the others and the developmental changes that can be caused by therapists who should pay closer attention to the "frame" functioning as the body in the autism.

I はじめに

広汎性発達障害者（以下、自閉症者）の発達において身体の問題は通過すべき大切な課題である。心理療法においては身体について焦点を当てること、あるいは身体像の獲得や変容に目をむけることは重要な課題とされてきた（伊藤，1984）。その身体の変容に自閉症者とのプレイを通して触れていく時、線を閉じるということによって生じる丸や境界性を描く「枠」のテーマがその関わりの中に生じてくることを日々の臨床活動で経験してきた。筆者が関わったある自閉症者はプレイセラピー場面で枠を描き、その中に色を塗り続けた。枠はセッションにより長方形であったり、円になったり、三角形になったりする経過をたどり、最終的に身体の輪郭（身体画）の表現が見られるようになった。その経過は枠と身体との関連性を示唆し、枠の表現の意味への問いを生じさせるものであった。渡辺ら（1982）は、統合失調症者との長年の関わりにおいて心理療法の重要な視点として、また、精神病理学的理解と心理療法の実践

を繋げる概念として「身体」と「枠」について論じ、「枠としての身体」を社会的、心理的、身体的防壁と述べた。自閉症者にしばしば見られる箱庭の箱や玩具箱や押し入れに入ったりする行為も渡辺（1982）の述べる枠に関連する行為と考えられた。筆者は自閉症者の傍らで彼らの枠に関連する表現に触れていくことで、枠が身体の形成過程に何らかの大きな影響を与えているとの考えに至った。

中井（1974）は、河合（1970）の統合失調症者は「柵を周囲にめぐらせてからその中に箱庭を置く」との発言により、枠を治療的に有効に利用する「枠付け法」を提案した。自閉症者も統合失調症者と同様に自己存在基盤が弱いことを考えると枠の表現という現象を治療的に有効な視点として位置付けることが可能であろう。「枠」と「身体」に焦点を当てるのが自閉症者の理解を深め、彼らとの心理療法を実りあるものとするとは筆者は考えているが、心理療法を実践する場合、自閉症者が発達障害であるがゆえ、「発達」「関係性」についての根本的な問題や特有の現象を視野に入れて考える必要がある。

従って、本論文では筆者との心理療法過程で生

* Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

じた枠と身体の現象とその意味について検討し、さらに心理療法の過程で枠を表現し続けることにより最終的に身体画を描くことに至った事例を通して枠としての身体の発達的変容、枠の表現を媒介としたセラピストとの関係性について検討し、枠としての身体に焦点を当てた心理療法について考えてみたい。

II 方法

1. 現象論：自閉症者と枠

筆者がセラピストとして自閉症者との遊戯療法を通して経験した枠に関する現象を記述する。

- 1) 対象は2人の自閉症者である。事例Aは自閉症と診断された男子で、3歳から6歳までの経過において描画により表現された枠の現象、事例Bは高機能広汎性発達障害(アスペルガー症候群)と診断された男性で、20歳から21歳までの経過においてレゴブロック(以下、レゴ)を用いて創作された枠の現象である。
 - 2) 遊戯療法の過程で生じてきた枠に関する現象を記述する(事例中に語られたクライアントの言葉を「」, Thの言葉を<>で表記する)。ここでは守りとしての枠様の機能をもっている環境に身を置くことも広い意味で枠と捉えて記述する。他者との関わりを障害の特徴とする自閉症者の場合、またその結果を遊戯療法の実践に役立てていくことを考えた場合において、生じてきた行動の有無ではなく、目では見えないThとの関係性の質を問うことが重要であり、枠が生じた文脈が大切になってくる。従って、ここでは実験室的実験やVTR記録は行わず、主観的要素が含まれる筆者自身の遊戯療法の実践において生じてきた現象を記述する。
 - 3) 枠として表現された描画や作品、あるいはその枠の変容過程は写真を用いて示す。
- ### 2. 本質論：自閉症者の枠の意味
- 現象論により取り上げた枠に関する現象を素材として自閉症者の枠の意味について検討する。
- 1) 分析の指標として、自閉症者の身体としての枠の機能を外枠と内枠に分けて定義する。
 - 2) 枠の現象の意味を捉えるため自閉症者の身

体の外枠作りと内枠作りに焦点を当てて、その意味について検討する。

3. 心理療法論：自閉症児の枠としての身体の獲得
遊戯療法の過程で枠を表現し続けた自閉症者とセラピストとしての筆者との関わりについて記述し、検討する。

- 1) 対象は他者とのコミュニケーションが上手くとれないと母親が訴える1人の自閉症男児Cにおける6歳1ヶ月から11歳10ヶ月までの5年9ヶ月間の遊戯療法過程における主に描画として表現された枠の現象を取り上げ、記述する。
- 2) 遊戯療法の実践へ活かすことを考えてセラピストとの関係性の質を重要視するため枠が生じてきた文脈の記述が必要となる。従って、筆者の主観的要素が含まれた記述とする。
- 3) セッション(以下、#)は原則として50分、毎週1回とした。ここでは、#1から#157までを取り上げる。
- 4) 枠としての身体の発達的変容、枠の表現を媒介としたセラピストとの関係性を指標として、身体としての枠に焦点を当てた遊戯療法について検討する。

III 現象論：自閉症者と枠について

枠について考える場合、渡辺ら(1982)の述べた概念が参考になる。渡辺は統合失調症者との関わりを通して、枠について「(ある患者が)頑丈なコンクリートの部屋のなかに身を置くことができたなら、その身体が世界との明確な枠を持ったということであり、それは具体的な他者の侵入を防止する枠である・・・己を他者ならざる己として確立するために必須の枠の確保である」と述べている。さらに「外面的、社会的な自分を確保し、安定させるような対他者的な枠」としての外枠と、「己の内的世界をしっかりと、自分の内に保持するための枠」としての内枠に分け、その境に位置するものを身体とする「枠としての身体」について概念化した。

自閉症者にしばしば見られる円や長方形等の枠の表現やその中に絵を描いたり、物を入れる等の枠に関連する現象も統合失調症についての見解と同様に身体との関連性があると考え、セラピスト

として筆者（以下、Th）が経験した事例を通してその現象に触れてみたい。ここでは守りとしての枠様の機能をもっている環境に身を置くことも広い意味で枠と捉える（事例中に語られたクライアントの言葉を「 」、Thの言葉を〈 〉で表記する）。

事例A：自閉症 3～6歳男児

Aは人に恐怖心を抱き人との関わりを避ける、言葉の遅れのある子どもで、普段は信号機のミニチュアを持ち歩いていた。外からの刺激に対しては過敏で恐怖心が強く、物音がするとプレイルームにある押し入れを開けて中に入ってしばらく出てこなかった。箱庭の中の砂を手ですくって上から下へと零す感覚的な遊びを繰り返し、しばらくすると箱庭の枠のなかに身体ごと入りじっとしていた。Thは彼の世界をそっと見守った。クレヨンを持つようになったある時、うっすらと長方形の枠を描いた。Thはその枠に守りの薄さを感じたのでしっかりとした枠を描いてやるとAは枠の中には大きな殴り描きを、枠の外には小さな殴り描きをした。それをきっかけに自ら枠を描くことが頻繁に見られるようになった。枠を描くことでAは安心感を得ているようであった。その後、数字の意味は理解できないが、数字が並ぶ規則性に興味を示すようになった。Thが枠を描くとその枠の中に数字を書き込むという相互のやりとりが生まれ、Aとの関わりが深まっていくにつれて、ThはAの数字への関心やその意味を取り上げて話かけていった。Aはある時から同じ番号を何度も繰り返して書くようになった。その数字は相談室の部屋番号を見て覚えたものだが、実際にその数字はその部屋にいるThを指して使っていることが分かった。平仮名についても枠を描いてから一文字ずつ枠の中に描いていくことを繰り返した。平仮名も次第に意味を担うようになった。その後、Aは今まで興味を示さなかった鏡という枠の中に映し出される自分の身体像を見るようになった。鏡を見て身体を動かし、自分の動く身体を見る姿は鏡に映るThと自分の存在を確認しているようであり、鏡という枠の中で自分の身体とThの存在を見ることはAに守られている感覚を与えているようであった。その後、身体像を描いたり自分やThの名前を言葉で表現するようになった。

渡辺が「頑丈なコンクリートのなかに身を置く

ことは身体が世界との明確な枠を持った」と述べているようにAは押し入れや箱庭に入り、枠によって身を守っているようであった。また、Aが持ち歩いていた信号機のミニチュアも精神分析により自閉症者と関わってきたTustin (1992) が述べる自閉対象と考えられ、Aの身を守る役割を果たしたようであった。その自閉対象は自らをその感覚によって保護するという意味をもっているがAはまさにその感覚的世界に守られているようであった。箱庭の枠の中に身体ごと入ったり、Thとの関わりにおいてうっすらとした枠を描いたり、枠の中に興味のある数字を描き込んだり、枠としての鏡におさまった身体やThの存在を確認したり、Aは枠により自らを守りThとの関係を膨らませているようであった。そして、枠としての機能をもつ守られた鏡を媒介にして自分の視覚的身体像を発見した（伊藤，1984）ように思われた。枠がAとThとの繋がりとなることで自閉対象を持ち歩くことは減少した。つまり枠が感覚の世界から意味世界への掛け橋となり言葉を使った交流を可能にしたように感じられた。

事例B：高機能広汎性発達障害（アスペルガー症候群） 20歳～21歳男性

Bは20歳になって社会適応で苦勞した。バイトや就職をしてもすぐにクビになってしまい、情緒が不安定になってしまうことが続いていた。そのような状況で初めて専門的な関わりを求めて母親とともにThのもとへ来られた。母親は独り言が多いこと、理解困難なファンタジーの世界の言語表現を使うことをどうにかしたいと思っていた。一方、Bは社会適応が上手くいかない原因を低い身長にあると意味づけ嘆いていた。1m70cmの身長や自分の名前が偽りのものであるという自己同一性に関する問題をもっており、特に本当の身長である2m以上の身体を取り戻したいという願いは強く、光よりも早く、ビッグバンが起きても壊れない強い身体が得られればすべてが上手くゆくと思っていた。Bはレゴに興味を示し、Thにレゴの作品を作るためには、どうしても大きな土台が必要であると述べ、購入して欲しいと求めてきた。Bが安心できるしっかりとした大きな土台をThは購入した。ThはBが必要とするパーツを用意し、Bはそれを使って作品を作るという共同作業が始まった。長方形の土台の形に合わせて積み上

げられたレゴは頑丈な長方形の器となった（写真1）。Bは作成中、上機嫌で気持ち良く作っていたが、時々イメージ通りに作れなくなると興奮を露にすることもあった。しかし、理想の作品に近づくにつれて精神的にも安定していく様子が見られ、土台となる枠を高く積み上げるとそれは「何でも入れることができる」「どこへでも飛んでいける」「光よりも早くビックバンが来ても壊れない」と絶賛する乗り物が完成した。その後、共同で創作されたその作品について話し合い、彼の強靱な身体を求める情緒的なメッセージを受け入れ、共有していくことで内的な枠が形成され、社会適応上の悩みを現実的な悩みとして言葉を使って話し合うことが可能となった。半年もの時をかけた作業が終わり、精神的にも安定が見られ仕事に継続して通えるようになった。

作品の基礎を作る土台としての枠づくりは何でも入れることができる容器となった。その乗り物の中にアイテムを入れていく作業は、強い枠に守られながら彼が欲していた感情を満たしてゆくようであった。半年もの時をかけて内壁もしっかりと創作したその作品に対して彼は「光よりも早くビックバンが来ても壊れない」と理想とする身体への欲望を表す言葉を述べた。作品作りを通して壊れそうな自らの身体に外的な守りとしての枠を強化し、彼の理想とする巨大な身体像を象徴的に作りあげ、内在化したように考えられた。

高機能自閉症者のWilliams. D (1992) は自らの人生について世の中から身を守ろうとする戦い、もうひとつはその反面なんとかそこへ加わる

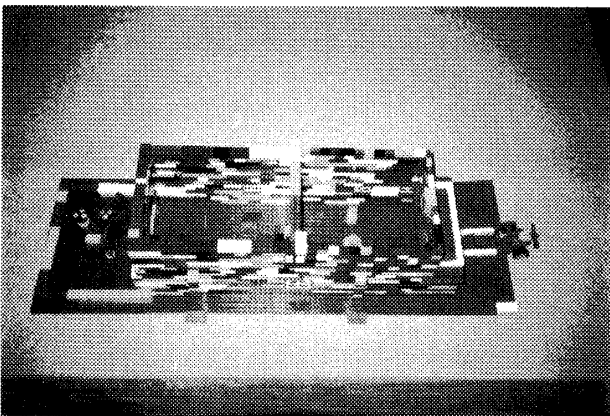


写真1
長方形の器ができる。

うとする戦いと述べているように自閉症者が押し入れや箱庭に入る現象には早期の混沌とした外の世界から身を守るための枠の機能が見られ、また枠をThと共同で創作する作業には身を守りながら他者との繋がりを築く枠の機能が見られた。

IV 本質論：自閉症者の枠の意味について

Williams. D (1992) やBemporad (1979) が自らの体験を語って示したように自閉症者の世界は混沌とした恐ろしい世界である。自閉症者はそのような世界のなかで自分というものを位置づけ、そして他者に対して自分であることを確立し、生きていかなければならない。そのような世界における自閉症者の歩みを、ここでは枠の機能により身体を形成し、その身体の危機と崩壊に耐え、維持していくプロセスとして考えてみたい。そこで、筆者はAとBの2つの事例において生じた枠の現象を踏まえながら、渡辺が外枠と内枠に分けた枠の概念を参考にして、そこに社会的スキルの獲得や発達の要素を加え、自閉症者との関わりのなかで生じる枠について定義づけをした。外枠を「現実世界で身を守るための（構造化された環境などの）安全基盤の確保、人間が自分であることを確立し維持するための（生活習慣の獲得、認知や言語の発達、人間関係形成における社会的技能の獲得などの）対他者的な社会的、身体的防御壁」、内枠を「身体の危機と崩壊に耐えるため自分の内的世界をしっかりと自分の内に保持するための枠」と定義する。例えば、感覚が過敏な自閉症者のために環境を構造化するTEACCHプログラムやGrandin. T (1995) の締めつけ機 (hug box) ように、自閉症者が感覚刺激から身を守るために落ち着ける空間を作ることは外枠作りであり、混沌とした世界に生きる自閉症者がそこに身を置くことができたなら、その身体が世界との明確な外枠を持ったということとなる。また、対他者との交流をする能力（拒否する能力も含め）の獲得や対社会適応のスキルを獲得することは外枠を厚く強くすることであり、社会的、身体的防御壁の獲得、つまり身体の外枠の形成に繋がる。一方、心理療法のように情緒的表現をとるような内的作業、それを受け入れる機能に焦点を当てた関わりは内枠作りであり、それにおいて自閉症者が自らの情緒をコントロールすることが可能になることは自分の

内的世界をしっかりと自分の内に保持するための内枠を持ったということになる。その外枠と内枠の境界にあるものが身体である(渡辺, 1980)。外枠と内枠は明確に分けることはできず、外枠作りが内枠作りの作業へと結びついていることもある。内枠作りによって外枠の機能を形成することもある。外枠と内枠は身体の表と裏として重なりあうものであるとの考えにより外枠作りと内枠作りを身体像の獲得及び自己存在基盤の形成の過程として捉え、その枠の意味について考えてみたい。

1. 外枠作りと外的防御

Williams. D (1992) は「何かを囲むような丸や境界線をさかんに書くのは、自分の外に存在するもの、つまり世の中からの侵入を防ぐための装備を自分で施そうとしている」と述べている。Betelheim, B (1967) も同様に自ら関わった症例ローリーが描いた境界線と円も特別の意味のあるものであったと述べている。ローリーは特別の砂場に境界を描くという行為を繰り返した。それは身体としての境界を築き、内と外、自と他が形成される過程と考えられる。ローリーは学童期に入った時、不安のあまり目を閉じて過ごすようになった。そのようになってから小さな乳母車に入ることが増えた。その乳母車に入り物理的な枠に守られている時と黒板にチョークで四角や円を熱心に描いている時にだけ彼女は目を開けたと言う。これらのことと同様に事例Aの丸や円等の枠を形成したり、事例Bの身体を象徴する作品を創ったりする作業は自分の外に存在するものからの侵入を防ぐための装備であり、外界から身を守る防御としての外枠作りの表現である。また、押し入れや箱庭の枠の中に入ったことは混沌とした世界において感覚的な刺激や対他者的防御として物理的な環境に守られたことであり、自分が安心して存在する場を確保したという意味においては「その身体が世界との明確な枠を持った」のであり身体の外枠の芽生えである。身体が世界との明確な隔たりを持つことは鏡に映る身体を我がものと認知する鏡像段階の視覚的身体像の獲得へと繋がっていく(Lacan, 1966; 伊藤, 1984)。そこに至って人間が自分であることを確立し、維持するための対他者的な社会的、身体的防御壁としての外枠が形成され、統合された身体へと近づくのである。これらの外枠作りは発達の過程で生じて

くる現象でもあり、彼らが強力な外枠により身を守りながら発達していく存在であることを示している。つまり自閉症者はWilliams. D (1992) が丸を描き続けたように様々な守りとしての作業による外枠作りをしながら他者との交流の世界を形成していくのである。

2. 内枠作りと内的安定

事例A, Bの枠を作る行為や創作作業にともなう自閉症者との関わりに新しい展開が見られるときには、枠に感情を入れ込む行為や情緒表出がともなう枠の創作が見られる。枠の現象の変容において枠が防御壁としての外枠の機能だけではなく、感情を入れ込む器として機能する過程が存在する。それは枠が身体の危機と崩壊に耐えるため自分の内的世界をしっかりと自分の内に保持する内枠として機能していると考えられる。他者から身を守り行為である外枠作りが内的な安定を施す内枠作りの作業へと変容するプロセスがある。

自閉症者の内側の世界に目を向けてきたTustin (1972) は、自閉症を思考以前の心理的発達において生じる、感覚が優先されている病理であると考え、自閉症状は母親からの身体的分離(乳首と口の喪失体験)によるトラウマから生じたうつ状態への防御であると述べている。自閉症児の原初的恐怖は、「奈落に落ちること、底なしの地獄、崩壊、自己の消失(Winnicott, D. W, 1958)」である。Bion (1962) はその恐怖を包み込み、それを耐えられる感覚に変える母親の機能を重要視した。その母性基盤が欠落すると感覚的知覚に意味を与える感性が作動しなくなる。従って、分離の穴(痛み)を身体の一部のように常に持ち歩く硬い物体(自閉対象)によって埋めようとするようになる。その自閉対象は発達を抑制させるとともに、自閉症者に意味のない行為を生じさせ、硬く、強迫的な感覚の循環を生じさせる。Tustin (1972) は「ブラックホール」という表現を用いて、あるものが吸いよせられ落ちていく空間について触れ、自己の破滅的崩壊、存在感を根本から消失させると述べた。自閉症者は落ちていく底のない地獄に対する底としての枠、そのような恐怖を包み込む母親としての枠が必要となる。その枠の機能によってバラバラであった身体、あるいは崩壊しそうな身体が統合へ向かって働き、身体像の形成が見られるようになる。このように身体の内側か

ら内的安定を促進させ身体を作り上げていくことが身体の内枠作りである。Williams. D (1992)も日記に小さな白い四角が黒い大きな四角に囲い込まれている絵を何度も描いたことを述べている。その絵の黒い四角の囲いは、「わたしの世界」と「世の中」の間に横たわる、飛び越えなければならない暗い闇だと述べている。その黒い大きな四角(枠)は世界と私との境界における枠としての身体である。また、その描かれた「超えなければならない暗い闇」は身体的分離の穴であり、Tustin (1972)の言う「ブラックホール」を表現しているとも考えられる。しきりにその枠を描く行為は吸いよせられ落ちていく空間に対する底としての枠、自己の破滅的崩壊を防ぐ枠を強化しているようである。その作業はThとの情緒的交流を伴うことにより、枠作りは、そこに母親の機能、乳房の機能を含み身体の内枠作りとして機能する。自閉症者はそこを上手く越えていくことに困難を示しているがゆえにその枠を描くことに終始していることが頻繁に見られると考えられる。Tustin (1972)の代表的なピーターの事例においても意味世界へ通じる象徴的な表現が生じる前に枠の表現(鍵の輪郭を繰り返し描く作業)が生じていることも同様の現象と考えられる。筆者は彼らとの関係を深めることにより自閉症者の根源的な恐怖を包み込む守りとしての枠を作っていくことが大切な課題であると考えている。

枠は外枠作りという視点から見れば外的世界からの防御壁であり、内枠作りという視点からは他者との関係性を基盤とした母親機能、乳房機能に繋がるものである。枠は世界と自分、自と他、内と外を示しており、境界としての身体であると言える。以上のような枠の働きが機能すれば、枠は自閉症者の生きる世界の守りとなり、自閉症者を感覚的世界から意味世界へと繋げる媒介となり、自閉症者の象徴機能の形成、身体像の獲得、身体基盤の安定をもたらせるものと考えられる。これらの視点を考慮した上で自閉症者が枠に執着することを考えると、自閉症の障害の本質は、「枠としての身体」の弱さにあると言える。

V 心理療法事例：自閉症児の枠としての身体像の獲得について

枠に焦点を当てていかに彼らと向き合っていく

かについて実際の事例を通して考えてみたい。ここでは鏡像段階(1966)における身体像の獲得という典型的な自閉症者特有の越えるべき課題がより顕著に現れる折れ線型の自閉症児との5年9ヶ月の事例を紹介する。

1. 対象：C(＃1～157 6歳1ヶ月—小1特殊学級～11歳10ヶ月)男子

＜主訴＞他者とのコミュニケーションがとれない(母親の訴え)

＜家族構成＞父39歳(会社員)、母36歳(主婦)、長男10歳、次男8歳、本児6歳

＜生育歴＞

妊娠中異常なし。在胎10ヶ月。普通分娩。出産時体重3640g、首の座り4ヶ月、8ヶ月に人見知りがあり、10ヶ月「マンマ」等の言葉を喋り始めた。目も合った。1歳半の検診の時、言葉は「マンマ、ネンネ、アイタ、ポイ、ハッパ、オチャ」等10語程度あったが2歳頃までになくなった。指さしをしなかった。2歳半にN市の児童福祉センターやIクリニックで自閉症と診断された。2歳から3歳にかけて目が合わなくなった。特に音に敏感で、手で耳を塞いだりするようになった。物を並べたり、道順にこだわった。好きな遊びはパズルやビデオ。3歳の時は時計や地下鉄の音をひどく怖がり大変だった。

2. 事例の経過

第1期：＃1(6歳1ヶ月)～＃9(6歳3ヶ月)

—自販機に固執する自閉的な枠からトランポリンのなかの関係性に基づいた枠へ

＃1、視線はThに向けられず、さまよい宙に浮いているようであった。Thを身をかかわして避け、玩具の自販機の操作を繰り返した。＃4ではトランポリンにひとりで乗り跳んでいたCは、Thがマットに乗りジャンプすると「きゃっ、きゃっ」と笑った。しかし、Thと向かい合うことを避けて跳ぶことが多かった。ホワイトボードに勢いよく走っていき、そこに長方形を描きその中に十字を描いた。＃5自販機を用いた遊びから、マジックを使って長方形の枠を描きその中を塗る遊びが大半を占めるようになった。＃8ではトランポリンで跳んでいるCにマットの下から手を差し出すとThの手だけを見て寄ってきた。動きも柔らかく、緊張や身体の硬さが少しずつとれてきたように思われた。＃9ではThが揺らすトランポリンの動き

にCの身体の揺れが重なりあっているように感じられた。

小考察

自販機の遊びは他者を遮断する遊びのように思われた。その自販機は口から取り入れて排出する身体のようにも考えられた。自販機に同一化した彼の身体は外枠として機能を果たしていた。トランポリンの上では彼の身体から生身の柔らかさを感じることができなかった。トランポリンの振動による感覚的世界への興味を引き出す存在として筆者が彼の世界に触れていく過程でトランポリンが共有の空間、守られた外枠となっていく。自販機の操作という自閉の殻にこもって自分を守ろうとする外枠作りから、防御壁を緩めて感覚的世界を共有する存在として筆者を恐る恐る受け入れていくようになり、Thとの関係性が守りとなっていくようであった。枠を描きその中に十字の交わりを描いたり、その枠の中に豊かな色を塗る行為は、トランポリンの枠の中で関わるThとの関係性や情緒的交流の芽生えを表現しているようであった。その枠に保護されながらその枠のなかに膨らみをもたらせるトランポリンの上でのThとの関わりや描画による枠の表現は身体に生身の柔らかさをもたらせるように感じられた。

第2期：#10（6歳4ヶ月）～#18（6歳6ヶ月）
一枠の共同制作と視覚的身体像獲得への試み

#10ではテーブルの上の画用紙が目に入るとトランポリンを降りて枠を描き、その枠内に色を塗り始めた。Thが後を追ってCの傍に座るとCは背を向けて画用紙を隠した。#11ではCは枠を描き、その中に色を塗ることを繰り返した。ThはCから離れて同様に枠を描いて、その枠の中を塗ってみることにした。しばらくすると、チラッ、チラッと視線を向けるようになった。#12ではThが色を塗っていると、Thの傍に背筋を伸ばして座り、身を乗り出してThが描いている絵をじっと見るようになった。それを契機に描画と一緒に描くようになった。#15でCは傍に近寄って来て座り、Thの前に自分のクレヨン置き、背筋を伸ばして画用紙を覗き込んだ。そのクレヨンで長方形の枠を描きその中を塗ってみた。Cは身体を揺らしながら真剣な顔でThが描く絵を見ていた。自分が絵を描いている時のように「うーうー」と声を出し、

身体を動かした。徐々に情動が高ぶってくるとじっと座っていることができず、「うーうー」と声を出しながら立ち上がった。Thの身体とCの身体が響き合っているように感じた。しばらくするとその場を離れ、トランポリンで遊びに行くが少し離れたところからThが描いている姿を見ていた。#16ではThにクレヨンを差し出して色塗りをするよう要求し、自らはその場を離れて遠くからThが描いている様子を見ていた。Thの手の動きが止まると色を塗り終えたことを察知して近寄ってきた。そして自らクレヨンをもって補修しその作品を心地良さそうに眺めた。

小考察

Thを意味のある存在として興味を示すようになるとThの描いた枠についても関心を示すようになった。Thも枠を描くことができること、枠をもっていることを示していくことでThを信頼できる他者として、また不安を抱えることができる存在として受け入れてもらえたように思われた。枠を描く行為が彼の身体の響きと通底しているようであり、ともに描く行為は、情緒を投げ入れて包み込む母性、抱えてもらう乳房を手に入れたように思われた。離れてThの描いている身体を見ることの増加は、Thの姿（身体）を見ることで絵を描く自分の姿（身体）を客観的に捉える試みの芽生えであろう。伊藤（1984）が重要視する自分の身体像を捉える行為の表れであり、身体の外枠作りの行為であろう。

第3期：#19（6歳7ヶ月）～#28（7歳1ヶ月）
トランポリンを跳ぶ感覚的な関わりから身体を介した情緒的交流へ

#19ではトランポリンの上で一緒に跳んでいると徐々にThの身体の動きに慣れて、Thの揺れに添うようになった。緊張が抜けて身体が開かれていくように感じる。#22、バランスを崩してトランポリンのふちに頭を打つ。頭をおさえ急に表情を変える。そこで「痛かったね」とThがその痛みを受け止めると身体を預けてくる。Thが体育座りをしているとそれを見たCも同じように座る。Thと同じ動作を繰り返すことが増え、Thに張り付くような模倣が時々見られた。#23ではThが身体にゆっくりと触れると情動が昂進して笑いが止まらなくなった。Cは感情が高ぶると自分からThの身体に抱きつきしばらくじっとしていることが

増えた。Thが目を離した隙に四つん這いでトランポリンから降りようとしてトランポリンの縁まで行って立ち止まり、Thの方を振り返って何度も様子を伺った。Cは自分の行動をThがしっかりと受け止めているかを確認するかのように、Thの反応を見てにこっと笑った。#28では、Cは落ちていく感覚を体験するかのようにThに自分の身体を持ち上げ下げすることを要求した。Thがそのリズムに合わせてくはっ>とCへ声をかけると、Cも感情が高ぶるとThに向けて「はっ」と返すようになった。

小考察

Thとのトランポリンの振動を通じた感覚的な結びつきや身体的関わりを積極的に求めてきたり、Thの身体の動きと同様に自らの身体を重ねようとする行動が見られた。Dは、身体的分離は恐ろしいので、分離を拒み張りついているようであった(Bick, 1968)。#23でThが目を離した際にそっと離れようとする行動からCと母親との間で体験している分離の不安をThがCの立場になることで感じられるようになった。さらにThは積極的に関わり、そこに意味世界へと導くためには避けては通れない分離を体験させ、身体を通じた情緒的交流により、感情を受け止めて返していくなど身体の内側を支えるようにした。外枠作りと内枠作りを心がけていくことによってThへ向けられた感情を表現する発声が生じるようになった。身体交流を通してバラバラであった自己受容感覚が統合され、身体の全体像がまとまってくるような印象を受けた。

第4期: #29 (7歳2ヶ月) ~ #76 (9歳2ヶ月) - 身体分離に伴う枠への情動噴出

#34ではプレイルームに隣の部屋のCが入ってきてしまう。「うーうー」と怒りを露にしながら力強く赤い波線の枠を描き、その中を赤い色で塗る(写真2-I)。#35ではCの傍で同様に波線の枠を描くと興味を示してくる。クレヨンでCの画用紙の前に置くと、Thの描いた波線の枠の中にはみ出すことなく色を塗る。Thが枠を描きその中をCが色を塗るやりとりが続く。#46ではレジスターを叩いたり、もぐら叩き、サメ叩きゲーム等攻撃的な遊びが増えた。また#61ではThの胸に手を触れる等の身体接触が増え、反応を伺い笑うようになった。#70では画用紙の上にCはクレヨン

を使わず自分の指で人の顔と胴体を描く。Thはそれを真似て人の輪郭を描く。Cはその輪郭の中に色を塗るが興奮が高くなり途中で止めてしまう。#70からエレベーターに人形を乗せて上げ下げする遊びに興味を示すようになり、それを何度も繰り返す。この頃、日常生活では車のロックがされているかが気になり公園においてある車を覗いたり、空き缶の蓋を集めるようになった。

小考察

プレイルームという彼の内側に入ってくる他者に対して強い抵抗を示すようになった。このことは彼のなかに枠が生まれてきたことを意味する。#34でCが描いた激しい波線はBettelheim, B (1967) の症例ローリーが作った境界線と似ていて、身体分離に伴う情動をその波線の枠の中に排出しているようであった。その描画は勢い余って枠から色のはみ出してしまっていたが、#35ではThが柔らかい枠を描くと落ち着いて、その枠の中に治まるように色を塗る。Thが彼の気持ちを受け止め抱える器を提供する存在となり、共同作業による枠の機能が明確に感じられるようになる。#70で身体の輪郭(身体画)の表現を途中で止めてしまったのはCの中の破壊性が溢れ出しそうになったのであろう。エレベーターを使って上げ下げする遊びは奈落に落ちる、底なしの地獄を再体験しているように思われた。また、車のロックを気にしたり、空き缶の蓋を集める行為は分離に伴う恐怖が漏れ出すのを防いでいるようであった。Thの胸に触れたり、画用紙の枠の中を勢いよく塗り潰すことが顕著となり不快な感情を排出しているようであった。その感情をThとの関係性を通して抱えることで枠は感情を入れる奥行きのある器として機能していくようであった。

第5期: #77 (9歳2ヶ月) ~ #157 (11歳10ヶ月) - 楕円枠の統合と身体像の誕生

#77では枠を描いてその中を塗った楕円形を複数作る(写真2-II)。#79ではその楕円形が接して1つとなる(写真2-III)。興奮して画用紙を破ることが増えた。遊んだ後におならをしたりトイレで大便をすることが増えた。待合室では母親の胸に手で触れたり顔を押し当てたりする。#116以降、高さ1m程の空気が入ったドラえもん型のビニール製人形に興味を示し、嬉しそうに見ている。ドラえもんの空気を入れたり、抜いたり

するようになる。#133以降、Cは顔も身体もふっくらと丸みをおびてきた。Cの描く枠も角がとれて丸みをおびてきたように思われた。プレイの時間中にトイレに行って大便をして戻ってくることが増える。#152以降、緑色と青色の2体の身体画を描くようになる。心地良さそうな表情や苦しそうな表情を豊かに表現するようになった（写真2-IV）。

小考察

情緒が投げ込まれる枠は丸みを帯びて母親の機能、乳房の機能を果した。従って、楕円形が組み合わさり身体画が表現される過程は身体の部分統合された身体像の誕生の表現として考えられた。ドラえもんを使って空気を入れたり抜いたりする内的空間を確認する行動や描画を通した象徴的な表現は彼のなかに意味世界を作り出す内的世界、心が生まれてきたことを示しているように思われた。

VI 心理療法論：総合考察一枠としての身体に焦点を当てた心理療法について

事例Aは恐怖の外的世界から身を守る防御として砂遊び等の感覚的世界や、押し入れや箱庭等の物理的な枠に入ったりした。その外枠作りを尊重し見守ることは心理療法の重要な視点である。事例AやCとのThの繋がりは混沌とした世界に自分を定位する守られた場を示す外枠となり、その枠は感覚的世界から意味世界への掛け橋となった。共同の枠作りを通して恐怖を包み込む母親としての枠、落ちていく底のない地獄に対する底としての内枠作りにより発達が促進された。事例Cが豊かな表情をもつ身体像を2体描いたことはThとCの関係性の表れであり、本児の内的世界が発達する基盤となっていたことを示している。関係性を基盤に内枠に目を向けることは内的世界の発達の促進に繋がってゆく。事例Bの身体像の混乱は、社

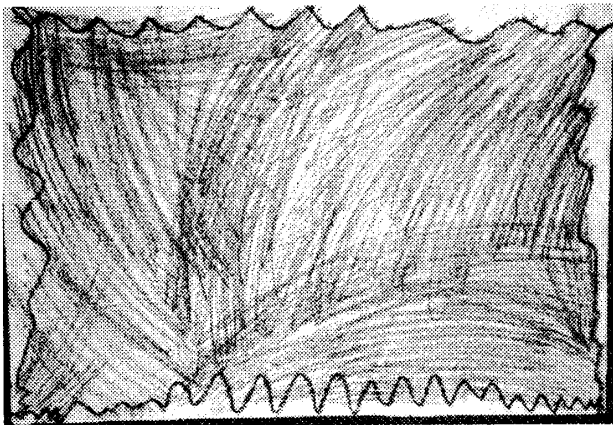


写真2-I
枠を描き、色が塗られる。

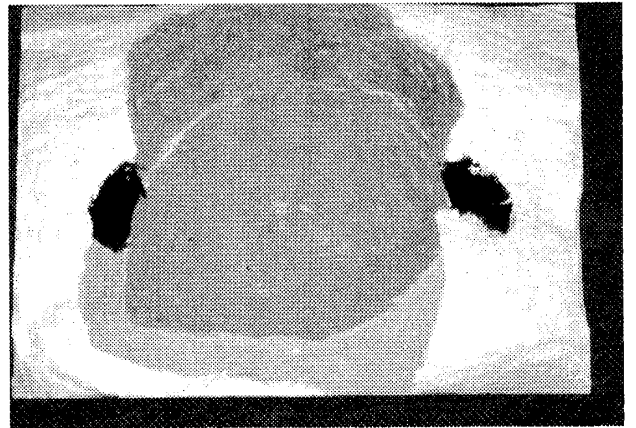


写真2-III
枠が統合されていく。

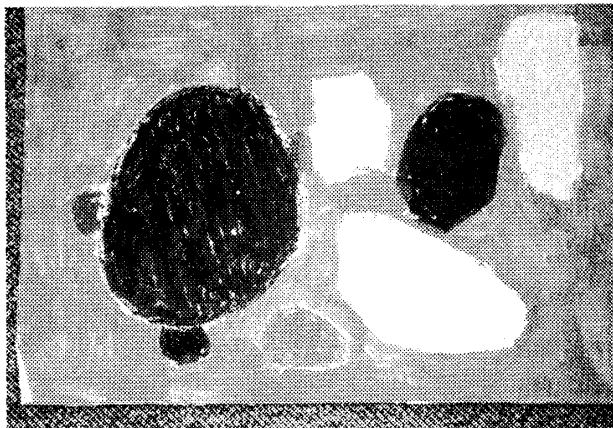


写真2-II
枠が散乱している。

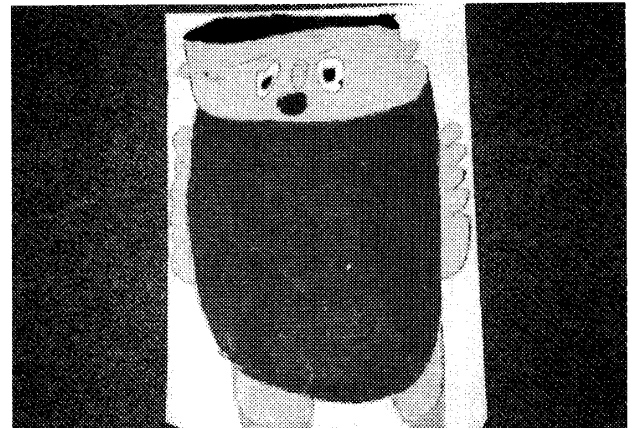


写真2-IV
身体の形態が描かれる。

会生活における外枠の破綻により、内枠が崩壊してしまっただけの現象と考えられた。作品創作によりしっかりとした内枠を整えることで外枠が維持され、身体像の崩壊を支えることができたと思われる。そして現実に向き合い、悩みや不安を言葉で語れるようになるまで再び社会に足を踏み入れるようになった。自閉症者の根源的な最果てもなく落ちていく不安を身体の内側から支える内枠作りと他者への防御壁や視覚的身体像の獲得による外枠作りが統合された結果、身体像が表現されたと考えられた。しかし、誕生した身体像は守りとしての鎧を覆った身体である。彼らに安全な環境を提供し、情緒的表現を汲み取って身体崩壊を守り維持していくことも心理療法の課題である。

以上、述べてきたように3つの事例は枠としての身体に焦点を当てること、外枠と内枠の両方に目を向けることの重要性を示していた。ここで事例の経過に基づいて、枠としての身体に焦点を当てた自閉症者との心理療法における枠の機能の発達の変容、枠の表現を媒介とした関係性の流れ、及びポイントを整理する。①枠の表現を捉え身体を定位する外枠としての守られた空間を提供する。②関係性を通して共有の枠を築いてゆく。③関係性を基盤に枠を形成する共同作業を通して関係性自体が身を守る枠へと変わってゆく。④情緒的交流によるThとの同一化にとともなう視覚的身体としての外枠が芽生える。⑤感情を入れていく器としての内枠が形成され、言語機能の芽生え、あるいは回復の兆しとともに描画や作品として表現された（長方形や円形などの）枠が意味のあるものとしての輪郭や形態をもつ。⑥象徴的な表現が可能となり統合された身体像が生まれる。事例Cにおける長方形から円形、さらに複数の楕円形の重なりから統合された身体画への一連の表現は自閉症者の内的な変容過程の表現であり、①から⑥の経過によりバラバラであった身体が纏まり、ひとつの身体像として統合されてゆくプロセスの表現だと筆者には思われた。

Ⅶ おわりに

枠の概念を外枠と内枠に分けて使用するの自閉症者への多様な支援の中で心理療法実践の意味を見出そうとする筆者の意図によるものである。外枠作りにより社会で適応するための技能の獲得

や守られた環境に順応することのみにエネルギーを注いでしまうと自閉症者の内的世界は平板化してしまったり、内枠作りのみに労力を費やすと社会適応が形骸化してしまったりする。筆者は自閉症者への臨床心理学的支援として外枠と内枠との補完的視点が大切であると思っている。

Ⅷ 謝辞

本研究の実施にあたり、多くの方々にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。統合失調症との関わりから刺激的な視点を提供して下さった岐阜大学医学部小出浩之教授に厚く御礼申し上げます。

Ⅸ 附記

本研究は文部科学省科学研究費補助金（基礎研究（B）課題番号 17730410）の助成を得た。

文献

- Bemporad, J. R. (1979) : Adult recollections of a formerly autistic children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 9 (2), 179-197.
- Bettelheim, B. (1967) : *The Empty Fortress : Infantile Autism and the Birth of the Self*. New York : The Free Press. 黒丸正四郎・岡田幸夫・花田雅憲・島田照三訳 (1973) : 自閉症・うつろな砦 1. みすず書房.
- Bick, E. (1968) : The experience of the skin in early object relations. *International Journal of Psycho-Analysis*, 45, 484-486.
- Bion, W. R. (1977) : *Seven Servants*. New York : Jason Aronson. 福本修訳 (1999) : 精神分析の方法 I. 法政大学出版局.
- Grandin, T. (1995) : *Thinking in Pictures*. New York : Doubleday. カニングハム久子訳 (1997) : 自閉症の才能開発 - 自閉症と天才をつなぐ環. 学習研究社.
- 伊藤良子 (1984) : 自閉症児の〈見ること〉の意味 - 身体イメージ獲得による象徴形成に向けて. *心理臨床学研究*, 1 (2), 44-56.
- 河合隼雄 (1970) : 箱庭療法. *芸術療法*, 1, 23-34.
- Lacan, J. (1966) : *Ecrits : Seuil*. 宮本忠雄訳 (1972) : 私の機能を形成するものとしての鏡像

- 段階. エクリ I. 弘文堂.
- 中井久夫 (1974) : 精神分裂病状態から寛解過程
—描画を併用させる精神療法をとおしてみた縦
断的観察. 分裂病の精神病理 2. 東京大学出版.
- Tustin, F. (1972) : *Autism and Childhood Psy-
chosis*. London : Hogarth.
- Tustin, F. (1992) : *Autistic State in Children*.
London : Routledge.
- 渡辺雄三 (1980) : 精神分裂病者への精神療法に
おける「外枠づくり」と「内枠づくり」. 季刊精
神療法, 6 (3), 56-67.
- 渡辺雄三・江口昇勇・安藤文夫 (1982) : 境界状
態の身体性についての現象学的考察—身体が傷
ついたことを契機として境界状態から精神分裂
病へと陥った症例をめぐって. 精神医学, 24
(6), 587-594.
- Williams, D (1992) : *Nobody Nowhere*. New
York : Avon books. 河野万里子訳 (1993) : 自
閉症だったわたしへ. 新潮社.
- Winnicott, D. W. (1958) : *The Capacity to be
Alone : In the Maturation Processes and the
Facilitating Environment*.